

岩手医科大学歯学会第33回総会抄録

日時：平成19年12月1日（土）午後1時

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室

特別講演

唾液腺腫瘍性筋上皮細胞の免疫組織化学的特徴：
特にp63発現ならびに軟部腫瘍との相違点について

原田 博史

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

筋上皮細胞は正常唾液腺組織においては腺房および介在導管周囲に分布し、基底膜を形成すると同時に、筋組織と同様の収縮能を有することから唾液を口腔内へ押し出す役割も担っている。腫瘍性病変においては、「腫瘍性（変調）筋上皮」といった言葉が物語るようにその形態は正常（非腫瘍性）のものとは著しく異なり、個々の症例や組織型によっても同系列の細胞でありながら免疫組織化学上の表現型にも少なからぬ差異がみられる。「腫瘍性に変調した」筋上皮細胞には上皮様細胞、紡錘形細胞、明細胞、基底細胞様細胞、形質細胞様細胞など、光顕的形態上の多彩なバリエーションが存在するが、なかでも形質細胞様細胞は正常な状態においてはそれに相当する細胞は唾液腺中のどこにも存在しない独特なものであり、通常多形腺腫、筋上皮腫、その悪性型である筋上皮癌にしかみられない特有の細胞とされている。

従来汎用されてきた筋上皮細胞のマーカーとしてはS100蛋白、 α 平滑筋 actin や筋特異 actin, vimentin が挙げられ、加えて一般には脳のグリア細胞のマーカーとして知られる glial fibrillary acidic protein (GFAP) も用いられる。また近年では actin と同様平滑筋のマーカーである calponin や h-caldesmon のほか p63 などが先進的なマーカーとして紹介されているが、免疫組織化学的検索に用いる際には特異性や感受性の面でそれぞれが様々な問題を抱えている。例えば S100蛋白はしばしば筋上皮を含まない他の唾液腺腫瘍にも発現し、逆に actin が全く陰性の多形腺腫や筋上皮癌もときに遭遇される。GFAP は actin が陰性の場合相補的役割を果たし得るが、多形腺腫、筋上皮腫、筋上皮癌ではしばしば陽性を示すものの、他の腫

瘍での発現頻度は低い。筋上皮細胞の関与の有無は組織型の鑑別における大きな分岐点となるため、究極的に「何をもって筋上皮細胞と見なすか？」は実際の病理診断にも深く関わる極めて重要な問題であり、今回検索の中心に据えた p63 は扁平上皮には反応するものの、通常管腔上皮には反応せず、筋上皮に対する反応性は非常に安定しているため、実際の診断業務でも有用性が期待される。またいわゆる軟部腫瘍を含む非上皮性腫瘍もときに上皮様特徴や筋線維芽細胞への分化を示すことから上皮性および筋原性マーカーの共発現をみることがあるが、p63 は間葉系組織には現在のところ発現を知られていないためこのような場合にも鑑別に有用と考えられる。

上記のように腫瘍性の筋上皮細胞はその形態や免疫組織化学的特徴を一義的に定義できるようなものでは決してなく、既存の腺組織に含まれる筋上皮がその分化を保持したまま「腫瘍性に変調した」細胞というよりはむしろ「何がしかの筋上皮に類似した特徴を有する（あるいは獲得した）腫瘍細胞」と解すべきであろう。

特別レクチャー

骨吸収抑制剤 ビスホスホネートによる顎骨壊死

水城 春美

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

近年、骨吸収抑制剤であるビスホスホネート (BP) が、骨粗鬆症の治療薬あるいは癌の骨転移の治療などに用いられるようになり、その症例が増加しつつある。それに伴って、BP の重大な副作用の一つである顎骨壊死 (ONJ) ・顎骨骨髓炎の発症が増加している。

BP による ONJ の発症頻度は、静注 BP で 0.8 ~ 12%、経口 BP で 0.7 / 100,000 人と報告されている。また、BP 使用開始から ONJ 発症までの期間は、BP の種類によって異なり、静注 BP が経口 BP よりも発症期間が短いと言われている。BP による ONJ は、多くの症例で抜歯やデンタル・インプラントの埋入などの

外科処置,あるいは歯肉膿瘍や歯槽膿瘍などの炎症性の歯科疾患と関連のあることが指摘されている。また,ステロイド療法や糖尿病などもONJ発症の全身的な危険因子と考えられている。

ONJの症状は,疼痛,顎骨周囲軟組織の腫脹,骨露出などで,病状の進行に伴い骨露出範囲が広がる。現在,BPの治療法にはまだ明確な指針がないが,抗菌薬投与や限局的な壊死組織の除去など,可及的に保存的な治療が推奨されている。また,BPによるONJの予防には,投与開始前の歯科検診と,抜歯などの観血処置が必要な場合はBP投与前にその処置を終了しておくことが勧められている。さらに,BP投与を受けている患者では,3か月ごとの口腔内健診,毎日の口腔洗浄と0.12%グルコン酸クロルヘキシジンによる含嗽の実施が推奨されている。抜歯はできるだけ避けるべきで,抜歯を要する場合は3か月程度,BPを休薬することが提唱されている。

当科で経験した,経口BPと静注BPによるONJの症例各1例も提示した。

一般演題

演題1. テキストマイニングを用いた定期健診受診者の心理分析

○杉浦 剛, 相澤 文恵, 岸 光男,
阿部 晶子, 稲葉 大輔, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

目的: テキストマイニングはテキストデータをさまざまな計量的方法によって分析し,役に立ちそうな知識・情報を取り出す手法であり,人間の行動,態度,心理,価値観などを理解するための新しい手法として社会調査などに応用されている。本研究ではテキストマイニングの手法を用いて定期健診に対する受診者の感想の分析を試みた。

対象および方法: 2007年3~5月,岩手医科大学附属病院予防歯科外来にて定期健診を受診した59名を対象に質問紙調査を行った。質問内容は性別,年齢,定期健診の継続期間,定期健診の感想,定期健診に対する満足度であった。定期健診の感想は自由回答形式とし,満足度は「まったく満足していない」を0点,「非常に満足している」を10点としたSD法の尺度を用いた。得られた結果の解析は統計解析ソフトSPSS12.0J, Clementine10.1およびText Mining for Clemen-

tine2.2Jを用いて行った。

結果: 受診者は男性30%,女性70%,年齢層は10代,30代,50代が多く,2年以上定期健診を継続している者が53%であった。定期健診に対する満足度は平均9.2と高い値を示した。性別,年齢,定期健診の継続期間と満足度との相関はみられなかった。テキストマイニングの結果,出現頻度の高いものとして「歯」「定期健診」「安心」「思う」「よい」「とても」「歯ぐき」などのキーワードが抽出され,これらの単語は同時に出現する確率も高かった。

考察: 出現頻度の高い単語どうしの組み合わせから,受診者は定期健診に対して,「歯と歯ぐきにとってもよいと思う」「定期健診によって歯(の状態)に安心する」という文章が再構築された。一方,満足度に影響を与える要因は抽出されなかったがこれは満足度のスコアが高い範囲に集中したことによると考えられた。今後,調査対象ならびに調査項目を増やしてデータを蓄積し,より客観的な要因分析を行う必要があることが示唆された。

演題2. 国民健康保険診療施設歯科診療所を研修協力施設とした地域医療およびへき地医療研修

○工藤 義之¹⁾, 岸 光男¹⁾, 熊谷 啓二¹⁾,
中村 弥栄子¹⁾, 柳谷 隆仁¹⁾, 遠藤 憲行¹⁾,
金村 清孝¹⁾, 古屋 純一²⁾, 齋藤 亮¹⁾,
浅川 麻美¹⁾, 八木 實¹⁾, 佐藤 健一¹⁾,
大平 千之¹⁾, 岡田 伸男¹⁾, 柴崎 信¹⁾,
星野 正行¹⁾, 高谷 直伸¹⁾, 古川 良俊¹⁾,
織田 展輔¹⁾, 浅野 明子¹⁾, 大久保卓也¹⁾,
野村 太郎¹⁾, 瀬川 清¹⁾, 清水 潤³⁾,
藤原 秀世⁴⁾, 三浦 廣行¹⁾

¹⁾岩手医科大学歯学部総合歯科臨床教育センター

²⁾岩手医科大学歯学部歯科補綴学第一講座

³⁾奥州市国民健康保険まごころ病院歯科口腔外科

⁴⁾普代村国民健康保険歯科診療所

目的: すべての研修歯科医が訪問診療,地域歯科保健活動を含む地域医療の修得およびへき地における歯科医療の経験を目的として,平成18年度本学歯科医療センターの臨床研修プログラムでは国民健康保険診療施設歯科診療所9施設において研修協力施設研修を実施した。本研修の分析と改善点の抽出を目的とした。